

日本と東南アジアの互助慣行の比較

—金融互助における絆—

恩田守雄 (流通経済大学)

1. 目的

本報告の目的は田植えや稲刈り、屋根の葺き替えなどの労力交換のユイ（互酬的行為）、道路補修などの共同作業や共有地（コモンズ）の維持管理、金銭を拠出してメンバーで順番に受け取る小口金融などのモヤイ（再分配的行為）、冠婚葬祭のテツダイ（支援＜援助＞的行為）という日本の互助行為について（恩田,2006;2019;Onda,2013）、フィリピン、インドネシア、タイと比較し相違点と類似点を明らかにすることである。このうち金融互助をとおした絆についても考えたい。この金融互助は社会的必要から生まれたが、その仕組みは国や地域で異なる。

2. 方法

上記の目的を達成するため日本とフィリピン、インドネシア、タイの一般および互助関連の文献を精読し、農村や山村、漁村で地元住民への聞き取り（半構造化インタビュー）調査を実施した。フィリピンでは2015年8月ミンダナオ島（ダバオ）、サマル島、ルソン島（ブラカン州、パンパンガ州）、2016年3月ルソン島（ベンゲット州、アルバイ州、南カマリネス州）、パナイ島、ギマラス島で行った（恩田,2016）。インドネシアでは2016年8月東ジャワのマドゥーラ島、シドアルジョ、マラン、2017年3月バリ島のギャニャール、クルンクン、タバナンで実施した（恩田,2017）。タイでは2017年8月東北部コンケン近郊の農村、北部チェンマイ近郊の山村、2018年3月北部チェンライ県メーサイ郡のアカ族山村、チェンセーン郡の農村、少数民族（タイ＜ルー＞族、アカ族、ラフ族、ルア族、タイヤイ＜シャン＞族）共生の山村で行った（恩田,2018）。

3. 結果

フィリピンの互助慣行は近代化の過程で衰退しつつあるが、村落ではまだ伝統的な互助行為が見られる。特に親族関係という血縁の系譜を中心にした互助ネットワークが存続している。日本のユイに相当する *suyuan*（タガログ語）や *lusong*（ビサヤ語）などの言葉が野菜の種まきや収穫で使われてきた。モヤイでは道路清掃など共同作業で *tulongan*（タガログ語）や *makipagbisug*（ビサヤ語）などが言われ、住民総出の作業は少ないが山村では皆共同作業に加わり団結力は強い。金銭モヤイ（金融互助）の *paluwagan*（パルワガン）がほぼ共通の言葉として存在する。その仕組みは都市では利息目的の日本の頼母子（無尽）に近似するものもあるが、村落では共済目的の積み立てが多く分配を均等にする。テツダイでは見返りを期待しない *tulong*（タガログ語）や *tabang*（ビサヤ語）の手助けの行為、葬儀では *abuloy*（タガログ語）や *dayong*（ビサヤ語）として弔慰金を出す。村落では相互扶助の *bayanihan*（バヤニハン）に基づく絆が健在である。

インドネシアの村落ではまだ伝統的な互助行為を通したつながりが強い。親族関係という血縁だけでなく地縁関係を中心にした互助ネットワークが存続している。東ジャワでは一般的な相互扶助の言葉にゴトン・ヨロン（*gotong royong*）があり、戦時中の日本の遺制として残る隣組の *RT*（*Rukun Tetangga*）や村組の *RW*（*Rukun Warga*）単位で手助けがされている。共同作業で *gugur gunung* や *kerja bakti*、冠婚葬祭の手助けでは *membantu* や *menolong* という言葉を使い、また日本の頼母子（無尽）に相当するアリサン（*arisan*）がある。マドゥーラ島のアリサンはイスラム教のクルアーン（コーラン）を読む集まりでもある。バリ島では日本のユイにあたる *saling tulongan*、冠婚葬祭の手助けで葬儀の *medelokan* や婚儀の *meaban-aban* の言葉が使われ、小口金融では同様にアリサンもある。ヒンズー教に基づくバンジャール（*banjar*）という宗教村が地域の統合を担い、これが宗教共同体として相互扶助であるバンジャール・スカドゥカ（*suka duka*）の場として機能している。

タイの互助慣行は衰退しつつあるが、村落ではまだ伝統的な互助行為の絆が見られ、地縁関係を中心に互助ネットワークが機能している。タイ人の農村では日本のユイにあたるローンケ

ーク（労力交換）が機械化により衰退したが一部まだされている。チェンマイ近郊の山村では仏教の教えに基づく「開発僧」による農村開発が進められ、伝統と近代の接合により発展している。アカ族の山村ではケシからコーヒー栽培への転作で豊かになる一方伝統的な文化（言葉）の継承が困難な状況にある。共同作業はどの村落でも地域住民の一体感を維持しているが、金銭的支援として小口金融のシェア（レンシェア）は行われていない。もともと中国の「社」がタイの中産階級に普及し、都市のタイ人のシェアでは利息志向が強い。この点東アジアの韓国や中国、台湾に近いところがあり、フィリピンやインドネシアとは性格が異なる。婚葬儀はシュアイ（help）という言葉で手助けがされ、少数民族では各出身地の生活様式が冠婚葬祭の互助慣行に投影されている。

4. 結論

日本とフィリピンを比較すると、相違点は家族や親戚を核とした互助ネットワークはあるものの集団主義の隣保共助がそれほど強くない点を指摘できる。これは公助や自助が強く共助が弱いというよりも、また日本のように人口減少に伴う共助力の低下ではなく、個人（世帯）レベルの貧困で余裕がない状況が影響していると考えられる。それでも地域社会で共同作業がされ、また伝統的な冠婚葬祭では地縁関係の互助ネットワークもまだ機能している。多島社会フィリピンでは共有地が少なく個人主義志向が強いと言えが、それは「何とかなるさ、どうでもいい、運に任せる」というバハラナ(bahala na)の精神に表れている。しかしその一方で金融互助のバルワガンは利息なしでメンバーの共済目的で多く行われ、仲間内の絆が保たれている。

インドネシアの東ジャワではゴトン・ロヨンという言葉が相互扶助として知られ、末端の行政単位としてRTとRWが近隣互助組織を形成している。バリ島では行政村や自然村に加え慣習村としてのバンジャール（宗教村）が存在し、バンジャール・スカドゥカという相互扶助がされている。日本のユイに相当する行為は機械化でほとんど見られないものの生活の隅々まで浸透した宗教に基づく互助行為は強く、特にそれは多様な寄付に表れている。イスラム教では制度的な義務喜捨のザカート(zakat)と自発的な任意喜捨のサダカ(sadaqah)、ヒンズー教では自由意志で寺院に寄付するプニア(punia)があり、これらは不特定多数の貧困者を対象にした互助行為と言える。またクルアーンが禁じていることもあるが、利息がつかないアリサンは共済と親睦の目的でされている。アリサンをコーランを読むために行う地域もあり、他の東南アジアの金融互助とは異なる。

タイではガーンシューイルアスンガンレガン（ガーンシューイルアは手助け、スンガンレガンは共有の意味）という相互扶助の言葉があり、思いやり（ナムチャイ）の心が浸透している。困窮者への救済では協同組合（サハゴーン）の利用が多く、公助や自助への要請は急速に進む近代化の証左とも言える。調査した農村では共有地（コモンズ）はほとんどないが、アカ族では保護森、収穫森、神聖森があり環境保全がされている。共同作業ではタイ人も少数民族も不参加の場合過剰金を科す点は日本と同じである。タイでは日本と異なり集団主義より個人志向が強いと言えるが、少数民族では自民族の共益を意識した互助ネットワークに基づく絆がまだ健在である。

フィリピンとインドネシアは多島社会として民族と言語がそれだけ多いが、金融互助の言葉はバルワガンとアリサンという共通の言葉が普及し連帯と共生の社会的絆が強い。これに対してタイの都市部では外来慣行として利息志向が強い分金銭関係の経済的絆が支配的である。こうした現地調査の知見を踏まえ日本との比較をさらに精査し、東アジアとの違いも視野に入れながら東南アジアに通底する互助慣行の構造を解明することが今後の課題である。

*科学研究費助成事業<学術研究助成基金助成金>による研究

平成27年度～31（令和元）年度、基盤研究C

研究代表者<個人研究>恩田守雄 課題番号15K03860

研究課題「日本と東南アジアの互助ネットワークの民俗社会学的国際比較研究」